



# 従容録に学ぶ(七〇)

## 第九二則 雲門一宝

〔示衆〕

衆しゆに示しして云いく、遊あそ戯び神しん通つうの大だい三さん昧まいを得え、衆しゆ生じやう語言げんごの陀だ羅ら尼にを解げし、睦むつ州しゆうが秦しん時じの轆りやく轆りやく鑽せんを拽ひ転てんがし、雪せつ峯ほうが南なん山ざんの豔えん鼻び蛇だを弄も出でぶ。還はた、此この人ひとを識し得とくく  
や？

〔本則〕

挙あぐ、雲うん門もん大師だいし云いく、「乾けん坤こんの内うち」(乾けん坤こんを包つつむ底そこは響ひびく)。宇う宙しゆうの間ま(宇う宙しゆうを立た底てる底そこは響ひびく)。中ちゆうに一いつ宝ほう有あり。「信しんぜざれば懐なつを搜さがせ」。形けい山ざんに秘ひ在ざいす。「早もろく是こ驢ろ、井いを觀みる」。灯とう籠ろうを拈つり仏ぶつ殿でんの裡うちに向むかう。「早もろく是こ驢ろ、井いを觀みる」。三さん門もんを拈つり灯とう籠ろうの上うへに来きく。「那なんぞ井いの驢ろを觀みるに堪たえん」。

また雲門の則か、と思う方もおられるでしょう。そうです。『従容録』にはそれほど雲門さんがテーマの本則

が多いのです。なぜならば、本則一〇〇を選んだ雪竇重顕せつぼうじゆうけんさんは雲門宗中興の祖とされる方で、五代時代たいごきつての禅の英傑だからなのです。今回の示衆・本則は比較的短いので、それぞれ万松さんの付けた著語しやくご(コメント)も採用しましょう。まず万松さんの「示衆」。

我々が日常と行う言動は、仏たちの三昧の境地に  
よりすべて理解され会得えとくされているんだ。たとえば、あの睦州が雲門をひつ捉えて悟らせた時の活作用や、雪峰が南山の毒大蛇を弄んだのなんかは、みな神通三昧の働はたらきなんだ。いったいこんな働はたらきのできる人を、君達にはようわかるかな？

およそこんな意味です。難語も多く使われていますが、あまり読みにくさにこだわらなくてもよいでしょう。中核ちかくさえつかめば。その中核は何かといえば、「形山」(肉体)に密ひそ在ざいしている宝だ、という教え。いうまでもなく、それは仏心・仏性と同じですね。ただそれが頭だけの理解ではなく、文字通りの形山、つまり身体全体でズシーンと理解し体得たいとくしているかが問題なのです。



さて、次が中心の「本則」。ここでは大きなスケールの言葉で示されています。

宇宙天地の

中の一宝は、つまりはこの個々の肉体に内在しているんじゃない。その働きのいえば、灯籠を仏殿の中に持ってゆくことも、三門を担いで燈籠の上に置くなんていう神通三昧すらできるんだ。

こんな大三昧に対する万松さんのコメントも面白いですが、「ロバが井戸を見る」と何度も云っていますね。これは禅語であり、ロバも井戸も無心だから無分別の動きとこのと。ところが洞山さんの弟子である曹山は、これを一層深めて、「井戸がロバを見る」ように「無心」も捨てるべきと主張しています。つまりの核心は、無心の境地や表現に酔わされず、それをどう活かすかであり、つまりは自分の無心体験にかかっている、といえましょう。

あれは、日光白根山に登った時のことでした。還暦ごろの九月独行だった、と記憶しています。菅沼の方から入り、漸く無事に静寂な五色沼のほとりに出ました。小さな沼ながら、東端からはチョロチョロと静水が流れ入る無風無音の午後、思わず水を口に含み、その側の大きな平岩に寝ころんで、静寂を味わいました。フト気づくと、北側の樹木はもうウッスラと紅葉、ついで西側、次が東側。南

側はまだ緑一色です。ああ、日光の照射で自然にこう冬支度をするのだと、人智をこえた自然の与える妙趣を感じながらの得難い半時間。やおら起き上がり、前白根に向かって登攀開始。尾根筋の途中で立ち止まり、沼を見降して仰天。東から西へと、沼の面が音もなく静かな静かな小波が移っている。しかも、一刻一刻と色を変えて。「これで五色沼というんだ」と感じ入り、しばらく動けなくなりました。ザックを背負ったまま。寸分の邪念も入りこむ余地もない、えも知られぬ「無心」のひとつときでありました。

無心は、こちら側で求めて得られるものではない。いわば、大自然が与えてくれる恩寵といわずして、何であろう。神がこの世で用意してくれる「めぐみ」は、こちらが妄想や邪念を止めた時、突如として付与される。かけがえなき「しじま」なのであります。

ところが、こんなこともあります。私がまだ研究職だった頃、毎朝のようにキップを買ってJR柏駅から電車に飛乗っていました。ある朝、売り場で千円札を入れたところ、ジャラジャラとおつりのコインがたくさん出てきた。何千円かはありました。これは困ったなと思いつつ、すぐそれをワシ掴みにして窓

口に行き、ホントのおつりだけ受取って電車に乗り、胸をなでおろした。その時にいささかの邪念も躊躇も入らなかつたからです。これを学生に話したところ、学生が「先生、損をしたね」と云ったのには開いた口が塞がらなかつた。一体、何が損得なのでしょう？「無心」になると損をするのでしょうか。ちなみに一頁左隅の挿絵は、禅門で好まれる「宝珠」ですが、秋野孝道禅師は「この玉は広き世界にあづけ置く、それがほしくば働いてとれ」と詠まれています。



百則を撰んだ重頭が禅法を振るつた  
寧波市雪竇山の現代大雄宝殿と大樹

降誕会

二〇二二年四月八日、降誕会（花祭り）が開催されました。暖かい、風のない穏やかな日中で、龍泉院には色とりどりの花が咲き、作務の行き届いた美しく、清々しい境内でした。まん防が解除され、参加者は椎名東堂、明石住職をはじめ、会員が一名。他に一般の方が男性一名、女性二名の合計一六名。参加者は昨年より多く、久しくお会いしていない会員の方の参加もありました。

降誕会の始まる一時間ほど前から作法のおさらいが行われ、二時に降誕会を開始。導師を明石住職、送迎を佐藤、殿鐘と維那を杉浦、侍香を松井、侍者を小畑（二郎）、堂行を五十嵐の各氏が担当しました。緊張感の漂う式が進み、マスク越しの般若心経の唱和も厳かでした。

式後、明石住職が「近くに寄って下さい」と言われ、ドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲルの著書から弓道を通して、次のような法話をなされました。

弓道には「射法八節」と言われる技法があ

ります。弓を射る時は①「足踏み」、②「胴造り」で下半身の安定、③「弓構え」、④「打ち起こし」、⑤「引き分け」、⑥「引きしほって満を持す「会」です。的に中（あ）てようとする意志はだめです。機の熟するのを待つことです。姿勢が決まったら、無心の⑦「離れ」が自然に行われる一になります。離れの余韻が⑧「残心」です。



降誕会に参加した参禅会員

弓道は筋肉を鍛えるスポーツではなく、自己の礼節を見につける学びです。『正法眼蔵』で説かれている「仏道をならうというは、自己をならうなり」を弓道に置き換えると、「弓道をならうは、自己をならうなり」と言える

と思います。

日本には「道」と名がつく各種の修業がありますが、華道、書道、芸道、武道などは、共通の根、仏教に遡ると思います。

「道」を修行するには次のような順序があると思います。それは

①守―師匠の監督のもと、基本、基礎を学び、ひと通りの物事ができる。②破―自分だけで教えられた物事ができる、③離―師匠から教えられたもの以外に、自分で工夫した新しい技を編み出すことができる。

これは禅のいう①自己をならう、②自己を忘れる、③自己、他己の心身を脱落する―と同じだと思っています。

降誕会は無事、円成。厨子のお釈迦様に甘茶をかけ、一同、筍掘りを楽しみました。

世の中は、コロナウイルスが変化を続け、新しく感染力の強い菌となり、一日の感染者数は高い水準で横ばい状況です。

また、二月二四日にロシアがウクライナに侵攻してから一カ月半が過ぎ、悲惨な報道が続いています。最後に、代表幹事の小畑節朗さんから、お供物の和菓子と次のようなお釈迦様の教えのお言葉を頂きました。

「殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」。

## 一日接心

二〇二二年六月五日。梅雨空ではありませんが、暑くもなく、過ごしやすい気候の中、一五名が参加して一日接心が行われました。新型コロナウイルスのまん延により、見送られていたため、三年ぶりの開催となりました。

オリエンテーションとして、松井さんから当日の流れについて説明がありました。坐禅は四柱を行うとのことでした。

八時二〇分から第一柱開始です。椎名東堂



坐禅をする東堂老師と参禅会員

は「行茶などは省略した形であるが、各々が坐禅を中心に修行する意識で行うよう」と述べられました。

第一柱の後、経行は行わず大悲殿へ移動して休憩。その後、再び坐禅堂へ移動して、第二柱を開始。第二柱では、『普勸坐禅儀』の前半を誦しました。

終了後、午前の講義が大悲殿で行われました。内容は『傘松道詠集』。道元禪師が詠まれた和歌集です。

道元禪師は歌人としても優れ、自然を素朴に読んだ和歌が多く、作家の川端康成氏がノーベル文学賞の授賞式講演にて、日本の美



しさを表す際に、道元禪師の和歌を紹介したとのことです。

講義の後、中食となりました。例年は典座の方が用意して下されましたが、今回は新型コロナウイルスの影響により、仕出し弁当でした。

午後からは第三柱を組み、終了後は『傘松道詠集』の後半部分の講義に続き、第四柱を行い、坐禅中、『普勸坐禅儀』の後半部分を誦しました。

椎名東堂の「一日接心円成！」という言葉とともに、一鐘にて無事一日接心が終了いたしました。

一六時から大悲殿にて茶話会です。

皆さんがそれぞれ感想を述べられました。が、初めての人が多かったことや、久々の接心であったことから「四柱目の坐禅は足が痛かった」という声が多数ありました。

差定が多少の時間的余裕があるものだったので、「もう一柱、追加の坐禅が可能ではないだろうか」という意見もあれば、「四柱でちょうどよい。休憩も必要」、「三柱でもよいのでは」との意見もありました。

「一日接心が開催できてうれしい。今後の活動の正常化を望む」という感想があり、皆

さんの共通したお気持ちだと思えます。

小畑代表は、「次回の接心は僧堂にて行茶を行いたい」との意欲を語られました。

明石住職も「新型コロナウイルスの影響により、一日接心が中止されていたため、初めて参加した。坐禅は呼吸を整えるだけでも意味がある。各自、健康に留意して取り組んで頂きたい」と述べられました。椎名東堂からは、「普勸



禅講する椎名東堂

坐禅儀には結跏趺坐、半跏趺坐の方法は示されているが、その法でないと坐禅ができないとは書かれていない。心の安心のためにも、各々が可能な形で取り組んで頂きたい」とのお言葉がありました。

新型コロナウイルスが無事終息し、来年度も一日接心が開催できることを願っております。

## 一日接心に参加して

柏市 石澤 健

六月五日、二度目となる一日接心に参加させて頂きました。

午前、午後、併せて四柱の坐禅。二柱目と四柱目の後半に『普勸坐禅儀』の読誦や午前、午後に道元禅師の短歌和歌集『傘松道詠集』についての禅講、五観の偈を唱えての中食などをさせて頂きました。

三柱目までは、坐禅堂周囲の多方面からの小鳥のオーケストラを聞いているうち、「いつの間にか放禅鐘が鳴ってしまった」ような感じでした。

最後の四柱目はさすがに足が痛くなり、とても長く感じられ、放禅鐘が鳴っても、立ち上がるのがやっとという様でした。

『普勸坐禅儀』に「安楽の法門なり」と書いてありましたが、安楽とは、ほど遠いものを感じました。

中食後など休憩時間がふんだんにあり、境内を散策しました。

先輩の方に三角山に野草を植えた様子など、いろいろ教えて頂いたりして、有意義な一日を過ごすことができました。

## 本格的な疑似体験

白井市 中原 悦雄

二〇二二年六月五日、椎名東堂、明石住職も参加され、参禅会員一七名が参加し、コロナ禍のため、三年ぶりの開催になりました。当日は、鳥はさえずり、樹木は隆盛し、花は咲き、真竹の筍が旬となるころでした。

当日は好天に恵まれましたが、坐禅中は睡魔に襲われ、大変でした。四柱目の頃には、足の痺れなど、例会にない体験でした。

私は本格修行の疑似体験をイメージして参加しましたが、結果はごく現実的、肉体的に苦しむ体験となりました。

後日、作務の時に機会があり、椎名東堂にお尋ねしました。「修業（一日接心）は集中力の醸成です」と言うことでした。そうですね。今回の一日接心は休憩時間に参加者が三々五々、境内の植物観察などを行い、かつ、談笑する場面が多くみられました。

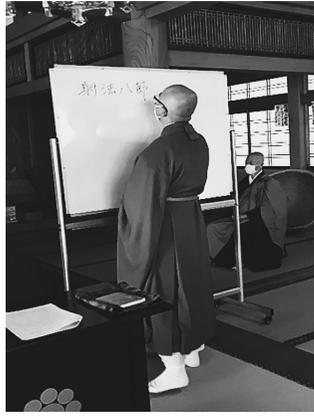
椎名東堂による禅講の時間には『傘松道詠集』の解説を頂きました。誰もが知る有名な歌もあり、大いに感動しました。今回は全体の四分の一のご進講でした。次回の禅講が楽しみです。

## これまでの回想と所感

龍泉院住職 明石 直之師

早いもので、龍泉院にきて、今年で四度目の秋を迎えることになりました。その間、世間は大きな変化を迎え、私個人としても、一つの転機を迎えることになりました。

まず、世間の大きな変化はといえますと、三年ほど前から猛威を振るい始め、現在に至っても、なお、その渦中にあるといえるコ



明石住職が法話を白板上で行う

ロナ禍により、日常生活が激変したことが挙げられます。そして、私の個人的転機はといえますと、二年弱ほど前に、当山の住職を拝命したことが挙げられるでしょう。

さて、龍泉院に来てからは、檀務に作務、並びに参禅会活動への参加と様々な経験をさせて頂くことができました。その際、それま

で私がいた環境とは、風土や習慣が相違することから、若干の戸惑いは隠せませんでした。が、時間の経過とともに、慣れていくことができ、今では貴重な経験として、今後の糧とすることができました。

とはいえ、この間における出来事とはいえば、やはり、コロナ禍を抜きにしては語ることはできないでしょう。

私が龍泉院に来た最初の半年は、世間は平穏で、とりあえず、如常の行事・生活を送ることができました。しかし、以後は、各種制限・制約が何かしら課せられた日常に身を置くことを余儀なくさせられました。

ですので、私の龍泉院での活動の大半は、「規模を縮小してでも、行事を執り行うか、中止・延期するか」という、苦しい選択を強いられることが常態化した日常での活動となりました。

こういったことは、何も私だけに留まるものではなく、参禅会会員の皆様や、檀信徒の皆様におかれましても、同様のことと思えます。

今はコロナ禍による冬の時代といっても過言ではありませんが、このような状態が、この先、ずっと続くのかという、決してそ

ではないでしょう。どういう形になるかはわかりませんが、いずれ、日常を取り戻すことになると思います。その際、この苦しい時期を乗り切った経験は、いずれ、役に立ち、「無駄ではなかったのだ」と、感じる時期が必ず来るものと固く信じています。

コロナ禍の回想が長くなりましたが、今秋は、参禅会発足五十周年の記念行事が実施されます。本来なら、昨年の実施予定が、コロナ禍により、一年延期となったわけですが。

この過程においても、参禅会の皆様や椎名東堂におかれましては、苦渋の決断をされてきたことと思います。よって、私は、この記念行事をまたとない機会と捉え、参禅会の次の五〇年、更には一〇〇年と存続していくきっかけになるよう、微力ながら、その一助になればと思っています。

叢林における一日の行事、更には年間の行事は、日々の太陽や月の運行と同様に不変のものです。

昨今の制限・制約の多い社会にあっても、できることは変えずに、コツコツと行い、次代へと伝えていくことが大切だと思っております。私はそのお手伝いを今後ともさせて頂きたいと思っています。

## 参禅会五十周年記念行事

コロナ感染症の流行もあり、一年間延期されていた「参禅会五十周年記念事業」が動き出しました。「参禅会五十周年記念事業実行委員会」が設けられ、五月一四日に第一回委員会が開催され、その後、六月一日、七月九日、八月二〇日、そして、九月一〇日に開かれました。



実行委の会合

同委員会は坐禅普及委員会のメンバーを基に新たにメンバーを増やし、新たな委員会として発足しました。同委員会の会合には椎名東堂、明石住職も参加され、龍泉院側の意見

なども述べられました。

記念事業は「第五回得度式」、「洞山良介禪師千百五十回遠忌」の二つからなり、「洞山良介禪師千百五十回遠忌」は記念法要、記念講演会、椎名東堂と講演者の石井修道駒澤大学名誉教授の対談の二本柱からなっています。概要は次の通りです。

### 「五十周年記念行事」概要

#### 《第五回在家得度式》

日時 一〇月二日(日)  
一〇時～一五時  
会場 龍泉院本堂  
戒師 椎名東堂  
費用 新得度者 二万円 再得度者 五〇〇〇円 再得度者(絡子希望) 一万五〇〇〇円

#### 《洞山良介禪師 千百五十回遠忌》

日時 一〇月三〇日(日)  
一一時～一五時三〇分  
会場 龍泉院本堂  
①記念法要 一一時～一二時三〇分  
導師 椎名東堂

②記念講演 一三時～一四時三〇分

講師 石井修道氏(駒澤大学名誉教授)

③対談 一四時四〇分～一五時三〇分

石井修道氏と椎名東堂

### 格段の志納金の喜捨を要請

三年間にわたる新型コロナウイルス禍により、数度に渡り、長期休会を余儀なくされた結果、志納金の収入が大幅に減少しました。

一方、『明珠』、『口宣』発行、HPメンテナンス、文書通信などの固定費用は、ほぼ平年通り計上されています。

年番幹事の説明によると、一年遅れの五十周年記念行事での出費も、今後増える中、参禅会は運営資金不足に面しているとのことですので。

七月二四日の定例会で、年番幹事から状況説明と同時に、会員に対し、格段の志納金の喜捨のお願いがありました。今まで同様、志納箱に志を納めて頂きたいとのことです。

## 施食会

八月一六日、施食会が龍泉院本堂で行われました。今回はコロナで参加者を新盆の檀家の方で、しかも、二名以下に絞りました。参加者は一六家、二九名でした。ただ、本堂はほとんど一杯。盛大な会になりました。

例年、一〇名近い僧侶の方も施食会に参加していますが、コロナの影響でか、椎名東堂を含め三名にとどまりました。



施食会の明石住職と椎名東堂

午後二時、明石住職が入堂。経を唱えた後、新盆を迎えられた一六名の方の名前を読み上げました。その後、修証義の総序の読経中に、

新盆の関係者の方々が焼香しました。

読経の後、お布施を頂いた方々の名前を讀み上げ、『修証義総序』を唱える中、役員、参禅会員が焼香しました。

最後に明石住職が「参加者を制限しましたが、参加して頂き、ありがとうございます」とお礼の言葉を述べました。終わったのは三時少し前でした。

## 自未得度先度他の参禅会員

参禅会員は日ごろ、龍泉院の各種行事に協力していますが、施食会は最も協力の度合いが大きい行事です。それだけに、当日よりかなり前から各種の作務に取り組んでいます。

直前に境内の草刈り、樹木の剪定を実施。通常、それらの作務は第一、第三金曜日と第二土曜日の午前中に行っていますが、今回は臨時に行った人々も多く、中には午後七時まで行った人もいました。

数日前から、明石住職は檀家を回ってお経を唱える「棚経」を行います。その間、龍泉院が留守になることから、参禅会員が玄関に座って、訪ねてこられる檀家の方々への対応に当たりました。参加人数は一〇名以上。



作業の間に楽しく懇談と中食

施食会当日は総勢一三名の会員が、九時に集合。本堂の設営と撤去も行いました。また、河本さんが殿鐘を務め、坂牧さんが役員の方々の接待に努めるとともに、梨をむいて参禅会員に配ってくれました。

「今年最後の猛暑」との気象情報があり、真夏の暑さの中、駐車場も管理しました。まさに「自未得度先度他」を実践したともいえるでしょう。

式後、参加した参禅会員に梨五個とどら焼き二個、お供物の最中二個が配られました。また、椎名東堂が当日上梓した『沼南の宗教文化論集』を全員に贈られました。散会はいくつ時過ぎでした。

## 三角山に移植した野草のその後

柏市 坂牧 郁子

昨年一月に山門の左手(本堂に向かつて)の三角山に移植した山野草は、この夏元気でした。

春、しっかりと根付き、新しい芽が立ち上がり、白雪芥子が先駆けて白い花をつけました。秋に花をつける野草も、どくだみにも負けず、確かな存在でした。移植した野草以外は取り除くべきか、随分、迷いました。



春に咲いた「白雪芥子」と「どくだみ」。

が、野においてはどれもがそれぞれに命の花を咲かせる「共生」すべき存在です。それぞれの生命に託しました。

例年より早い梅雨明け。人にとっても、植物にとっても過酷な猛暑でしたが、裏山から移植した山百合が見事に開花、七月一六日は見頃でした。



夏に咲いた山百合

立ち姿も凛とした山百合四本が移植した山野草を守るように囲んでいました。その内側には、椎名東堂が挿し木で育てられた椿の幼木もしっかり根付いていました。秋咲きの「吾亦紅」も力強い茂り。宅地造成により、旧沼南町より消えていった吾亦紅。偶然、道端で

見つけた二、三本を家庭菜園に移して育てたものを三角山に移植できました。今、その道はきれいに舗装され、草は絶えています。移植により、助かった命、繋がっていく命と思っています。

山百合を撮影に行った折には、下草も整備され、作務班の取り組みに感謝、感謝でした。やはり、人の住む近くは、良く整備された方が心地よく感じられました。

## 初代代表幹事高間氏の二七回忌

龍泉院参禅会の創始者、高間利介氏の二七回忌が六月二六日、龍泉院本堂で、親族の方々により、しめやかに行われました。

高間氏は龍泉院に近い場所で木工所を経営。近くに龍泉院があった縁で龍泉院に「参禅会」の設立を提案され、椎名老師(当時)の賛同を得て、設立されました。

現在の代表幹事小畑節朗さんが入会されたのは設立後三年目。当時の高間氏を知る人はほんの数人になりました。参禅会は既に創設後五〇年をこえました。高間さんがいなかったら、現在の参禅会はなかった(椎名東堂)という偉大な存在でした。

## 本多喬杉銘

二〇二一年五月に伐採された門前の杉の置物が本堂に置かれています。これは参禅会員の小林さんと辰巳さんが加工されたものです（明珠七七号参照）。

今回、参禅会員の杉浦さんが「本多喬杉銘」と名付けた立派な紹介の台を作られました。そこには椎名東堂がつくられた銘文が、同会員の牧野洋子さんによって、墨痕あざやかに書き上げられています。本堂に置かれていますので、ご覧になってください。

### 本多喬杉銘

生者必滅榮枯盛衰者眞理也當山門頭聳立大杉遂是昨夏五月拾五日伐採了此樹是本多候奇歸依當山植樹木而概齡略貳百貳拾五載高凡貳拾八米餘是沼南階壹喬木也當山參禪會員小林裕次辰巳彰比兒兩氏惜厥切端加工以爲寬衝立刺杉浦上太郎氏製作名板可謂偉哉爰記其梗概俾後世

令和四年貳月朔日

當山參拾壹世宏雄謹誌

牧野洋子謹書



本多喬杉銘（上）と台（右）

## 送り大師が龍泉院で結願

東葛印旛地区で、毎年、四国八八カ所お遍路を模した、送り大師が行われている。今年の結願は龍泉院で約二〇〇名が参加。巡拝の際は、真言宗だけでなく東葛印旛地区の各宗派の寺院を回った。

毎年、幟を掲げ絵になるような行列を組んで行われている。途中での参加や、途中でのリタイアもあるので、すべてを回らない人も多かったようだ。結願は今回、十七年ぶりに龍泉院で行われた。



龍泉院に向かう送り大師の人々

# 想うこと

## 古い最後

松戸市 小畑 節朗

身体の衰えて坐禅が出来なくなった時は？  
今年に入り老化が愈々激しくなり、坐禅堂の単に上がれなくなりました。椅子坐禅です。身近に見たことも無かった老病死が眼前に現れて来ました。小生、今年八六歳。

古い最後 死は必ずやって来る  
未来にあらず いつも今 今

これは、内山興正老師が八五歳で遷化される一年半前に作られた「老いを樂しむ」の詩の一つです。老師は平成一〇年（一九九八年）に八五歳で遷化されました。翌年遺稿集『いのち樂しむ』が刊行され、その中の「蒼空の深さのように」で「老いをたのしむ」の意を語られます。

【涅槃經によれば「佛とは涅槃なり、涅槃とは生滅滅已なり、畢竟歸なり」とあります。先に言ったように、死は生が滅する（消滅する）時ですが、この時、同時に滅も滅してしまいません。われわれは自分の死を生か滅する

時ばかりと違って恐ろしがっています。実はこの時、生死分別の思いも死ぬので生滅滅已（生も滅し、滅も滅し已る）のであって、これを涅槃といいます。

そして、これは人間の思いにかかわらず、絶対的に誰でも最後の落ち着き場所なので畢竟帰といえます。畢竟われわれが帰る所という意味です。その時、人間的思量（思いばかり）が働かなくなってしまう時なので、量りなき深さです。

これをお釈迦様は、既に古来インドにあつた結跏趺坐されることにより、生きている間に実際にこの生滅滅已を体得され、それに拠る坐禅を教えられたのです。真つすぐただ座る結跏趺坐の姿勢に骨を折りつつ、思い手放し手放しするのが坐禅です。

坐禅は、なかなか骨の折れる行です。われわれ若い間は煩惱妄想が旺盛で、普通の行では、とても思いを離れることは出来ない。坐禅修行に励むべきです。しかし老いも最後の時は、思いや欲望も衰え、煩惱妄想も薄れてきているので、今は佛の名を称える中に、思いが手放れるのではないのでしょうか。

いや、思いがすっかり片付いて、そして佛名を称えようとするのは、出来るはずではあ

りません。とにかく佛を念じ御名を称える中に思い手放しの工夫をしていくだけです】。

「佛を念じつつ御名を称える中に思いを手放しの工夫をする」とはどの様なことか？平成七年（一九九五年）に下さった自筆の小冊子『今夜安頌』に「今夜の眠り」という詩があり、手放し工夫を解く鍵と思わます。

この生死はすなわち佛の御いのちなり、私にとって今夜の眠りは死ぬ稽古

生きる限り思う限り 眠りは修行

私は今夜も 南無佛御いのちを念じつつ 安らかな眠りを修行する

永遠の眠りにいたるまで

『正法眼蔵生死の巻』の有名なお言葉を引いて、生死は一如のものであり生と死にわけられる以前での修行（工夫）をとにかく為し続けるのだという。

一日も終わり、ベットに横たわり、わがいのちの働きの途中での眠りに入る。これは死ぬ稽古なのだ。佛を念じつつ御名を称え眠りに入る。私自身、老い、最後に坐禅が出来なくなった時のおのれの安心は、佛を念じ、御名を称え、思いの手放しの修行に励むことと信じています。

## 「安心」を得た坐禅人生

柏市 杉浦 上太郎

四二歳の冬、参禅会に入門し、早や三七年。来年には八〇歳の大台に乗ります。人生の約半分もの間、有難くも椎名東堂に導かれて生きてきたということになります。

最近、歳のせいかな人生を振り返ることが多くなりましたが、浅学非才の私を助けてくださった方のなんと多いことを思い、心からしみじみ感謝の念が湧いてきます。

私は約四〇年間、製薬企業一筋のサラリーマンでしたが、三三歳から五年間はスピニアウトして、千代田区お茶の水で企画・デザイン会社を営んでおりました。

動機は、その前の会社でそのような仕事をしていた、専門誌に私のパッケージデザインが何度か掲載されたりして、少し慢心気味になっていったことから、「一〇年勤務したら脱サラする」と決めていたからです。

得意先は、出身校の日大のつながりで、有力なOBの縁で、日大、第一パン、関東通信局など。ほかに、大正製薬元常務の小野（みつる）氏が、大衆薬の卸業（株）小野十を設立したことから、そのPBブランドのパッケージ

デザインなどの業務を一切任せて頂きました。

因みに、同氏は「リポビタンD」の生みの親・育ての親ともいえるべき大衆薬業界の逸材です。その他、多数のお陰もあって、何とかやっております。

しかし、好事魔多し。ある日、不眠不休がたたって帰宅途中、最終電車の中で爆睡してしまい、終点で駅員に起こされ、そのまま反対側のホームから転落しました。電車が来る寸前でしたが、駅員に助けられ、九死に一生を得ることができました。その事故で肋骨三本を折りました。その後、仕事の継続については親族の猛反対もあって断念せざるを得なくなりました。

方向転換を検討していた最中、以前勤めていた会社の社長から復職しろとの猛アプローチがあつて、結局はその誘いを受けることになりました。

しかし、それは決して良い結果とはならず、大きな試練を受けることになりました。禍福はあざなえる縄の如し<sup>①</sup>の例えを、身をもって生きた半生でありました。

それから四年後、ダメな自分を何とかしたいとの一念で、永平寺様に一夜接心をさせて



第二回「在家得度式」（2001年11月3日）緊張の面持ちで「絡子」を授与されたところ。『大慈宏濟』の安名を授かり、感無量でした。

頂き、それから二週間後、龍泉院参禅会に縁を結ばせて頂きました。今思えば、それこそが私の本当の転機になったと思います。

お陰様で、それ以降の私の人生は、禍のない福だけの縄となったと思います。すなわち、「安心」を得たのでありましょう。

これは、まことに有難いことであります。参禅会発足五〇周年を迎えたことに因み、私の人生の半分もの間、尊い「安心」を与えて下さった人々や各種の事柄に心から感謝しつつ、思うままに感じることを述べさせて頂きました。

## 宗教改革者鈴木正三

我孫子市 小畑 二郎

五〇周年記念の在家得度式を前にして、いろいろと想うことがあった。以前に小畑節朗代表幹事に頂いていた『日本宗教の近代性』（中村元選集 第八巻 春秋社）の中の鈴木正三（一五七九〜一六五五年）の項を読み直してみた。この人こそ、まさに日本における在家仏教の道を歩んだ江戸初期の忘れられた近代の宗教改革者ではなかったのか。

鈴木正三は、徳川家康と秀忠の二代に仕えた旗本。関ヶ原の役や大阪冬の陣、夏の陣などで武功をあげたが、四二歳のときに突然、出家し、七七歳で没するまで、坐禅と念仏を眼目とする在家仏教に基づいて、衆生済度に努めた。修行の途中で一時期、曹洞宗の門下にあったとも言われている。

その教えには、西ヨーロッパにおける近代資本主義の勃興を導いたといわれるプロテスタントの職業倫理に共通するものがあった。「世俗の職業に精励することこそ、在家の仏教徒にとって、仏道修行そのものである」と教えたのである。士農工商の身分を上下関係のない平等な職業分担として解釈し直し、そ

れぞれの職業倫理に基づいて仕事に集中すれば、悟りを開くことができると弁じた。

すなわち、武士は世を治めることに精励し、農民は辛苦の多い農業に励み、職工は匠の技を通じて世に奉仕し、商人は商売をつうじて顧客の用向きを満たすことに努めれば、それぞれの職業を通じて仏道に励むことになるという。

正三は、そのうちでも特に商人の職業倫理に注目し、商人は利益を追求することを不可欠とするが、私利私欲によってではなく、もっぱら万人の利益に資することによって、「世界の自由」を実現すると説いた。

このような正三の職業倫理は、武士を政治家と見做し、農民と職工とをそれぞれの産業に従事する技術者や労働者として扱い、商人を企業家に置き換えることによって、現代経済における職業倫理に投影することができると。芸術や医療・教育など、近年になってから重要性を増してきたサービス分野における、ここで考慮されていない職業に対して、この職業倫理は敷衍することができる。職業倫理は、どんな職業に対しても、平等に尊重されなければならない。このことは、各人が自分たちにしかできない仕事に専念すること

によって、仏道修行になるという、在家修行者にとつて、誠に有り難い教えだと思ふ。

翻つて、現代経済の状態を想うに、多くの人々は、それぞれの職業倫理を忘れて、単なる金稼ぎのためだけの利益追求に邁進し、「貨幣錯覚」に陥っているように見える。

「貨幣錯覚」とは、名目的な貨幣単位の所得だけに幻惑されて、人々がそれぞれ本来の自己の面目（価値）を見失ったまま迷走していることを表している。アベノミックスや現代貨幣論（MMT）などの流行の経済学を担ぎまわっている政府の役人や経済学者たちは、まさにこのような「貨幣錯覚」を操作しているだけのことに思う。

より多くの貨幣を国民に与えれば、国民があまねく豊かになれるという幻想を振りまいたり、政府がいくら借金しても、インフレーションを起せば、その借金は帳消しになると囁く政府の役人たちは、「貨幣錯覚」を利用して国民を欺いているのである。

仏教の真髄は、禅にあり、禅とは、本来の自己を取り戻し、無心になって一点に集中することであると理解するならば、鈴木正三の在家仏教の説く職業倫理は、在家得度を授かる意義を考えるうえで、参考になると思う。

## 龍泉寺と龍泉院

流山市 市川 信彦

会社の転勤で、今から六年ほど前まで、会社の基幹工場がある広島県の三原市に、家族と一〇年ほど暮らしていました。当時、小学生に上がる前だった二人の子供達にとつては、幼少から高校時代までを過ごした第二の故郷かもしれません。

三原は瀬戸内海に面した、のどかな街です。隣町は浄土寺や千光寺など、多くの古刹で知られた尾道ですが、それに比べるとあまり全国区ではありませんね。お寺では臨済宗佛通寺派大本山の佛通寺がこの町では一番有名でしょうか。とはいえ、家族と折々伺うお寺は別がありました。そのお寺は龍泉寺といいません。

龍泉寺は標高三四〇メートルの白滝山という山の頂きにあり、一般の方は山の中腹から山道を歩いて行かなくてはなりません。

それでも山門をくぐって振り返ると、眼下に瀬戸内の島々と、それを繋ぐしまなみ海道の絶景を望むことができます。本堂裏には巨石が鎮座していて、その岩肌に彫られた石仏が目を惹きます。

四月初めには満開の桜の下、野点の抹茶を振舞って頂く行事が開かれます。

春の穏やかな瀬戸内を見下ろす境内での桜の下、野点の抹茶を頂いたことを今でも思い出します。

ここのご住職は武田道育さん。帰化されて、日本名ですが、アメリカ・ペンシルベニア州出身とのこと。

ネルケさんはつとに有名ですが、瀬戸内の



山頂から臨む龍泉寺と瀬戸内海

静かなお寺にも外国人のご住職がいらっしやいました。残念ながら直接お話ししたことは無

いのですが、お寺への道を歩いていると、軽トラに乗ったご住職が通りかかり、にこやかに挨拶頂いたことがありました。

三原での暮らしも前述の通り、六年ほど前に終わりとなり、本社の開発部門にまた戻ることになりました。

その当時、息子は学校生活や人との関わりに悩んでいました。そこで、心の拠り所を見つけれないかと、かねて興味があった坐禅を試してみようと思いたちました。

ネットで探していくうちに、三原にあった龍泉寺と同じ「龍泉」と名の付くお寺が目にとまりました。そう、龍泉院です。それから息子と連れ立ち、龍泉院の御門をたたき、もう四年ほど経ちました。続けてこられたのも、椎名東堂をはじめ皆様のご指導のおかげと思っております。

龍泉寺と龍泉院、偶然かもしれませんが、私にはどちらも心の拠り所としてつながる何かのご縁を感じております。

三原を再訪する機会あれば、また訪れてみたいですね。今度はご住職ともお話し出来ればと思っています。

<https://miharabito.com/article/article-286/>

## 仏教との出会い

柏市 齋藤 正好

私が初めて仏教を意識したのは平成一二年の母の葬儀の時でした。親族席に座って、前方で二人のお坊さんが進めている儀式をぼんやりと見ていて、「一体この二人は何をやっているのだろうか」と、ふと、そんな思いが浮かびました。

もちろん、それまでも葬儀には何回も出席したことはありますが、こんな疑問を持ったのはその時が初めてでした。仏教というと、倫理社会の授業の時に習った、輪廻からの解脱を目指すといったことぐらいしか覚えていませんでしたし、それまでは特に宗教全般に興味もありませんでした。それで、この疑問への回答を求めて、仏教の入門書を読み始めました。

何冊か入門書を読み進めるうちに、お葬式でお坊さん達がやっていたのは、死者に仏教の経典を覚えさせ、遅ればせながら死後に仏教徒に仕立て上げてあの世に行く準備をさせていたらしいということ、この儀式は江戸時代頃から庶民に広まったらしいということがわかりました。

一応、目的は果たせましたが、その後も折に触れ、特に仏教に限らず、宗教関連の本を読み進めました。ほとんどが入門書の類でしたが、そういった書籍を読んでいると、不思議に心が落ち着くのを感じていました。

それらの本の中には禅あるいは瞑想といった内容の本もありました。禅という言葉には何か惹かれるものがありました、その実感はまるで分かりません。瞑想といっても、一体何をすればいいのかが分かりません。

そうこうするうちに、だんだん、坐禅というものに興味が湧いてきました。ところが、本を読んで分かるものではありませんし、坐禅を実体験したいと思っても、そういう機会はなかなか訪れませんでした。

有名な坐禅会を調べて連絡をとっても、すでに予定人数に達していたりして、なかなか申し込めません。坐禅って人気があるんだなと思えました。そんな時にケーブルテレビのJCOMから坐禅体験会のお知らせがあったので、喜び勇んで申し込みました。

申込者多数の場合は抽選とありましたので、どうか当たりますようにとじりじりする思いで連絡を待っていました。後で聞いたところ、申込者は募集人数には届かなかったよ

うでした。そのJCOMの坐禅体験会がご縁で今に至ります。

この度、参禅会五十周年記念行事で催される在家得度式において得度を受けることになりました。母の葬儀で抱いた疑問を出発点として今度の得度式につながっていると考えると、不思議な縁を感じざるを得ません。

### 『沼南の宗教文化論集』を発行

龍泉院の所在地はかつて「沼南町」と呼ばれていましたが、柏市に統合され、現在は消えています。そこで、「この地域の宗教遺産や文化を後世に伝えよう」と、椎名東堂が『沼南の宗教文化論集』（A5判、三〇四ページ）が上梓しました。

椎名東堂は二年強前、沼南の宗教文化財などをまとめた『沼南の宗教文化誌』（たけしま出版刊）を出版しましたが、それに続く一冊です。

前書では短い文による紹介でしたが、今回は深みのある長文の論文を集めました。沼南町の歴史を研究したい方には必読。柏市に寄贈しており、市はこの本を旧沼南町の小学校と中学校に二冊ずつ配布することです。

